

そとぼり

通信

第 61 号 編集・発行 法政大学国文学会

羽根突きのこと

勝又 浩

昨日たまたま行った近所のデパートで、この時期らしく並べられた押絵羽子板をひとわたり見て、例によって自己満足の笑みを浮かべて通り過ぎた。というのは、私は浅草羽子板市で求めた西山鴻月作の「禿」を一つ持っていてそれが自慢、わが家のはそこいらのとは顔立ちが全然違うのだと、見るたびに確認しては独り悦に入っているからだ。

西山鴻月は一昨年、九一歳で亡くなられたが、押絵羽子板の顔を描く「顔相師」で、我々が会ったときは、江戸の伝統を伝える、既に三人しかいないなかの一人だと言われた人である。人形作りでも仏像彫刻でもそうであろうが、顔を描く・彫るのは、いわば魂を込める最も難しい仕事なのだ。西山さんは一五歳で親方のところへ弟子入り、一九歳で独立して、以来ずっと羽子板づくり一筋で職人だが、晩年は自宅を羽子板資料館にして開放、長年収集してきた古い羽子板などを展示していた。もう八年も前のことになるが、大学院国際日本学の卒業生佐野和子さんに連れられて六、七人でその資料館を訪問、西山さんに直接お話を聞く機会があつて、それが今も忘れられない。

西山さんは晩年、都の名誉市民や墨田区無形文化財保持者等々幾つもの称号を与えられていたが、そんな関係で招かれて外国で展示会を持つこともあつた。そんなとき羽子板・羽根突きのことを決まっていたが、ジャパニーズ・バドミントンだと紹介されて、そのたびに違うのだがなあと我慢しなければならなかったのだという。バドミントンとは、とにかく相手のすきを狙って打ち込み、打ち返せないようにするのが基本のスポーツだ。ところが羽根突きはそんなものではない。お互いに相手が打ち返しやすいうように打ち送ってゆくもの、そしてどれだけ長く続けられたかを楽しむものであつて、勝ち負けを争うものではないのだ、と。

この頃は錦織選手のお陰でテニスの試合場面をテレビでよく見るが、まったくあの徹底して相手のスキを狙って打つ意地悪さは何なのだろう。それでいて試合が終わると握手なんかして、あれは偽善でなければお芝居なのか。私は西山さんの話を聞いて感動、そこから蹴鞠のことを思いついた。奈良時代からあるあのゲームも、いろいろ細かな規則はあるのだが、要するに次の人が受け止めやすいように蹴って繋いでゆくもの、決して相手の失敗を待ったり狙ったりするような競技ではないのだ。

こうしたことから敷衍して言ってみたいことはたくさんあるが、今はここまでとしよう。羽子板はむろん日本の民俗文化の一つだが、羽根突き遊びもまたきわめて日本的な性格の文化、もっと言えば、我々の意識無意識を作っている行動様式の一つなのだろう。